

## 千葉県立美術館建築概要

設計：大高建築設計事務所  
 施工：株式会社竹中工務店  
 敷地面積：33,057.87 m<sup>2</sup>  
 建築面積：8,777.94 m<sup>2</sup>  
 延床面積：10,663.57 m<sup>2</sup>

### 【展示室面積】

第1展示室 437.76 m<sup>2</sup>  
 第2展示室 400.32 m<sup>2</sup>  
 第3展示室 469.08 m<sup>2</sup>  
 第4展示室 403.20 m<sup>2</sup>  
 第5展示室 824.19 m<sup>2</sup>  
 第6展示室 330.58 m<sup>2</sup>  
 第7展示室 566.56 m<sup>2</sup>  
 第8展示室 864.61 m<sup>2</sup>

### 【アトリエ・講堂】

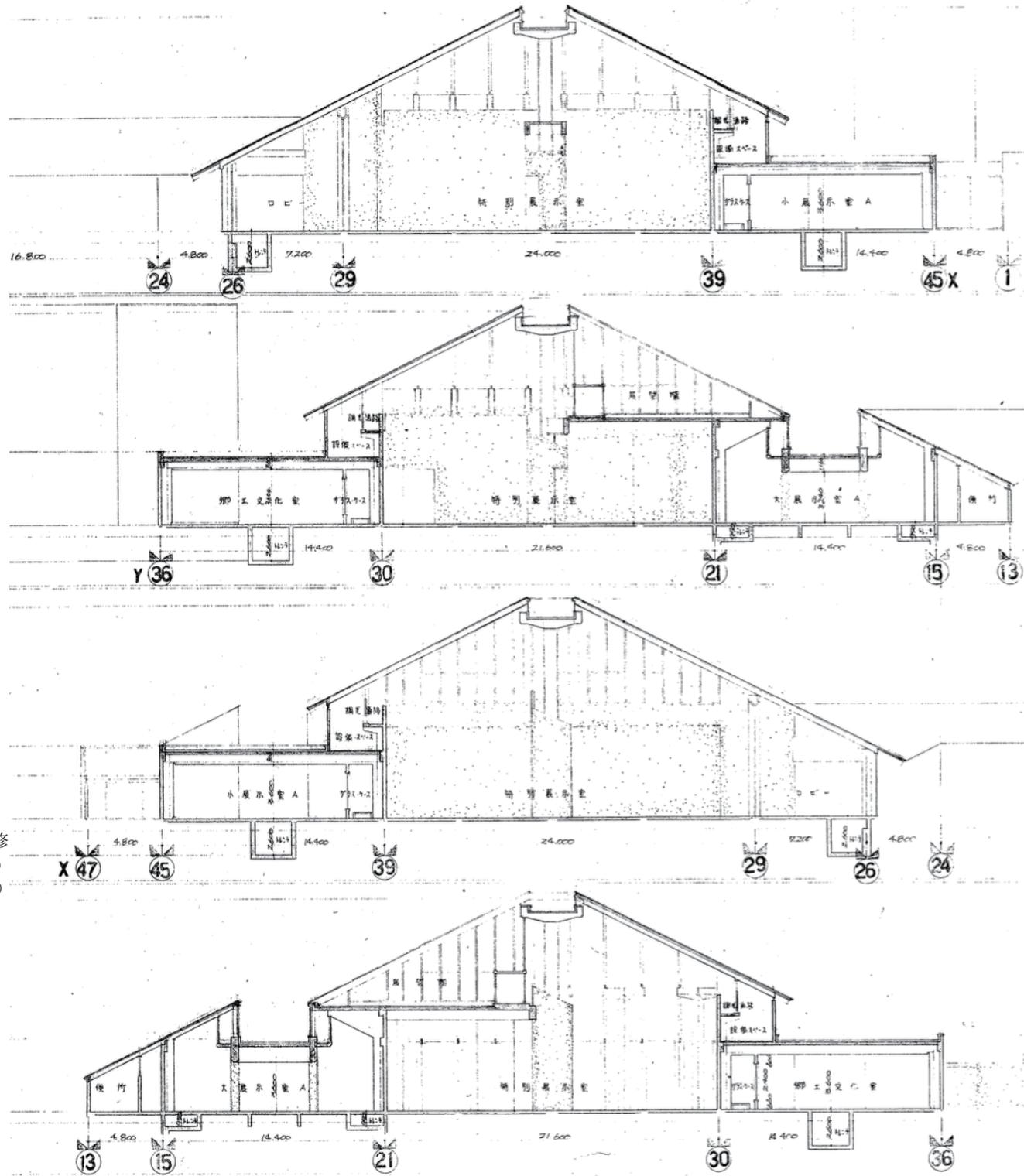
第1アトリエ 155.70 m<sup>2</sup>  
 第2アトリエ 184.31 m<sup>2</sup>  
 第3アトリエ 95.47 m<sup>2</sup>  
 講堂 259.24 m<sup>2</sup>

## 登録有形文化財（建造物） 登録概要

名称：千葉県立美術館展示棟  
 員数：1棟  
 建築年代等：昭和49年 / 平成24年改修  
 登録基準：造形の規範となっているもの  
 （令和7年3月21日答申、8月6日官報告示）

千葉県立美術館 建築への誘い

発行：千葉県立美術館  
 発行日：令和7年3月



# 千葉県立美術館 建築への誘い

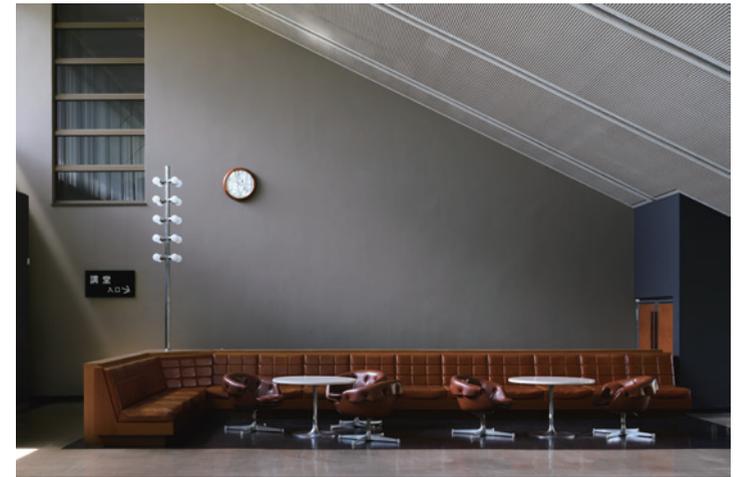
第8展示室は昭和63年に増築されたもの。千葉県立美術館は、実際に増改修が行われているメタボリズム建築である。



建築の中心に位置し、特に美しい景観を見せる第7展示室。大きなガラスから自然光が差し込み、高い天井と立ち並ぶ柱が圧巻の開放的な空間。



講堂前は、来館者にとっての憩いのスペース。高窓から差し込む光によって、傾斜屋根の造形が印象的に照らし出される。



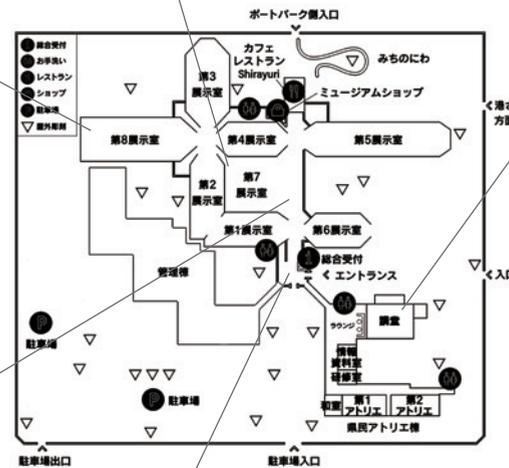
## 千葉県立美術館の建築と大高正人について

千葉県立美術館は、1960年代に展開されたメタボリズム建築運動の建築家の一人であり都市計画家でもある大高正人の設計により竣工しました。

この時期に大高が取り組んだ「傾斜屋根」の系譜に連なり、大きな傾斜屋根による第7展示室を中心に各展示室が広がります。

せつ器質タイルによる外壁、天然スレートによる屋根（当時）を特徴とするほか、段差のないバリアフリーの展示室とすることで、人々の生活に密着し親しく利用される美術館を目指して設計されました。

展示棟が最初に竣工した後、県民アトリエ棟、第8展示室や収蔵庫などが増築され、まさにメタボリズム（「新陳代謝」）の理念を体現する貴重な建築です。



## メタボリズム建築運動とは

昭和35年の世界デザイン会議の際、大高正人、川添登、黒川紀章、菊竹清訓、榮久庵憲司、栗津潔ら若手建築家、デザイナーが「メタボリズム・グループ」を結成。

建築や都市計画において、メタボリズム（新陳代謝）という概念を導入し、時代に応じた可変や増築が可能な建築・都市空間を提唱しました。

## 千葉県立美術館展示棟が登録有形文化財（建造物）へ

令和7年、竣工から50年を経た千葉県立美術館展示棟が大高正人による初期の美術館の秀作として、国の登録有形文化財（建造物）に登録されました。（令和7年3月21日答申、8月6日官報告示）



大高正人建築設計事務所は、館内の椅子や展示備品も設計している。



柱はコンクリートの研り仕上げ。柱などの角は面取りされ、建物を使用する人のことを思ったづくり。



大高正人は「フラットルーフを追放せよ」と、日本の伝統的な屋根に回帰した「傾斜屋根」を提唱。千葉県立美術館はその「傾斜屋根の系譜」の初期作品のひとつ。外壁は師 前川國男が開発した打ち込みタイルを発展させた「先積ブリック打込工法」によるせつ器質タイル仕上げ。